

事務費		平均年額
奏任俸給	所員五人	三、四〇〇円
判任俸給	書記二人	一、七〇〇
技手一二人	〃	二、〇六〇
備品費		一、〇〇〇
図書印刷費		一、〇〇〇
消耗品		二、五〇〇
通信運搬費		五〇〇
実験材料費		三、〇〇〇
各所修繕		五〇〇
国内旅費		一、〇〇〇
給與	慰勞金 五、八〇〇 嘱託五人 三、〇〇〇	八、八〇〇
雇員給	三人	一、八〇〇
傭人料	職工三人 月八〇年六、二〇〇 其他三人 月四、八〇〇	二四、〇〇〇
被服費	三人 月五	四、五〇〇
雑費		五、五〇〇
事務費		四、一五〇

經常部予算不足ヲ補充スル經費
俸給

本校ハ美術ニ関スル本邦唯一ノ学府ニシテ各部科ノ数モ多ク從ツテ多數専門的學者及技術家ヲ講師トシテ嘱託シアル状態ナリ 現在ニ於テモ其數二十四名ニシテ内無給四アルモ此ノ手当年額壹万

七千貳百七拾圓ノ多額支出ヲ要スル故ニ現予算額五千貳百五拾參圓ニ此スレバ尚壹万貳千余圓ノ不足ヲ生ズル現狀ナリ 此不足額ハ全ク他目ヨリ流用支弁セザルベカラザルモノニシテ教官ノ昇級等ハ全ク絶望ノ現狀ニアリ 依ツテ本年度ヨリハ經常部ニ於テ左記經費ヲ増額令達セラル、様切ニ希望スル次第ナリ

區分	金額	備考
學校及圖書館	10,000	
俸給	10,000	
講師	10,000	

(「工芸指導員養成所設置ニ関スル概算書類」収録文書より転載)

② 職員その他(「任免関係原議綴」その他による。)

昭和十五年

一月二十二日 矢崎好幸はセメント美術授業担任講師を嘱託される。

同月二十五日 教授兼生徒主事森田亀之助は臨時セメント美術教室主任兼務を、書記筒崎謙斎、同北浦大介、同宮本純一、同佐藤重吉は同教室事務取扱兼務を命ぜられる。

同月二十七日 講師関野克は東京帝国大学助教に任命される。

二月十二日 二月十一日紀元節拜賀式後記念講演を依頼した中村孝也に謝儀として本校より三十円贈与。

三月二日 名誉教授正木直彦死去。

四月一日 元富山県立工芸学校教諭、陸軍歩兵中尉八田辰之助（昭和二年鍛金部卒）は助教に任命され鍛金部勤務を命ぜられる。

四月六日 生徒古美術見学旅行につき、前年同様岸熊吉、新納忠之介、富田一昭、入江幾治郎、安岡立雄は臨時実地指導を嘱託され、南薫造、高村豊周、西田正秋、羽下修三、佐々木卓、北浦大介、瀬谷義広は三重県、奈良県、京都府へ夫々出張を命ぜられる。

同日 嘱託増井兼吉は病気のため依願解嘱となる。

同月十日 学校長芝田徹心は生徒修学旅行状況視察（同月十四日より二十三日まで）を許可される。

同月十二日 芝田徹心は、同日設置された美術振興調査会の委員に任命される。

同月三十日 江島信一は臨時嘱託を解かれ、さらに中華民国へ視察旅行の序をもって本校教授上参考資料となるべき美術工芸に関する調査を嘱託される。

同月 教授森井健介、講師岡田捷五郎は学術研究のため四月二十九日より往復とも十日間、朝鮮京城へ出張を命ぜられる。

五月二日 生徒野営演習に關し、地形偵察のため野中宇八、豊田朝一郎、斎藤幸晴は五月三日より往復とも二日間、習志野および下志津へ出張を命ぜられる。

同月六日 片岡照三郎は漆工部の彫鏤実習授業を一学期間臨時嘱託され、田辺穰、原三郎は海洋画に關する資料調査を臨時嘱託される。

同月八日 生徒野営演習のため野中宇八、豊田朝一郎、斎藤幸晴は五月十日より往復とも四日間習志野へ出張を命ぜられ、同じく野中宇八、佐藤政司、豊田朝一郎、斎藤幸晴は同月十四日より往復とも四日間、下志津へ出張を命ぜられ、また、佐々木卓、森田亀之助は五月十一日、習志野へ出張を命ぜられる。

同月十五日 同じく佐々木卓、筒崎謙斎、宮本純一は五月十六日、下志津へ出張を命ぜられる。

同月十七日 学術研究のため建畠大夢は五月二十一日より往復とも十六日間、高村豊周は同日より往復とも三週間、伊原宇三郎、矢沢弦月は同月二十二日より往復とも十六日間、朝鮮京城へ出張を命ぜられる（鮮展審査が主目的のため旅費は朝鮮総督府より支給）。

同月二十日 学術視察のため北浦大介は五月二十七日より往復とも二週間、朝鮮京城へ出張を命ぜられる（李王家美術館長葛城未治の依頼による事務打合わせ、陳列替への用務のための出張で、旅費は同館より支給）。

同月二十九日 芝田徹心は女子学習院長に任命され、浦和高等学校長澤田源一が本校校長に任命される。

六月八日 澤田源一は美術振興調査会委員に任命される。

同月十一日 澤田源一は帝室博物館顧問に任命される。

同月十日 生徒野営演習につき、野中宇八、豊田朝一郎、斎藤幸晴は六月十一日より往復とも四日間、佐々木卓に六月十一日、習志野へ出張を命ぜられる。

同月二十一日 同じく野中宇八、豊田朝一郎、斎藤幸晴は六月二

十二日より往復とも二日間、富士裾野へ出張を命ぜられる。

七月一日 同じく野中宇八、豊田朝一郎、斎藤幸晴は七月二日より往復とも四日間、宮本純一は七月二日、富士裾野へ出張を命ぜられる。

同月三日 同じく佐々木卓、森田亀之助は七月三日より往復とも二日間、富士裾野へ出張を命ぜられる。

同月六日 野中宇八に代わって陸軍歩兵大佐徳永徳が本校配属将校代理を命ぜられる。

同月八日 川崎小虎は陸軍嘱託として献納聖戦画製作のため九月中旬より約二カ月間、北支方面へ出張を命ぜられる。

同月九日 同様に伊原宇三郎は十一月末より約二カ月間、南支南寧方面へ出張を命ぜられる。

同日 文部省は第二回日独青少年交驛会事業として九月中旬より十二月下旬まで約三カ月間、日本青少年団指導者代表六名をドイツに派遣することとし、本校講師小塚新一郎をその一員に加えることを決定。

同月十三日 生徒主事補高橋吉雄は興亜学生勤労報告隊北支および蒙疆派遣本校代表生徒内地訓練所へ引率のため七月十四日の習志野出張を命ぜられる。

八月二日 徳永徳に代わって陸軍歩兵大佐三橋利三が本校服務を命ぜられる。

同月十六日 小塚新一郎はドイツ国における戦時下青少年運動調査を文部省より囑託される。

九月十六日 田辺穰、原三郎は臨時囑託を解かれる。

十月一日より十一月二十四日まで第四回文部省美術展覧会に代わ

って紀元二千六百年奉祝美術展覧会が開催され、職員中より藤島武二、結城素明、北村西望、建畠大夢、南薫造、和田三造、香取秀真、朝倉文夫、清水南山、津田信夫、小林万吾、田辺至らが委員として審査に従事。

十月十一日 十月四日本校設置記念式の際に講演を依頼した関保之助、石川巳七雄に謝儀として本校より各十円贈付。

十一月七日 高村豊周はアメリカ合衆国および中部アメリカ諸国へ出張を命ぜられる。

同月十二日 本年度学徒野外聯合演習につき豊田朝一郎、斎藤幸晴、佐藤重吉は十一月十四日より往復とも二日間、森田亀之助、佐々木卓、三橋利三は十一月十四日、習志野へ出張を命ぜられる。

同月十五日 学校長澤田源一は工芸技術講習所長に補せられ、書記宮本純一、筒崎謙斎（翌十六日付）は同所書記兼任を命ぜられる。

同月二十日 教授六角紫水、助教授松田権六は展覧中の正倉院御物漆工製品の拝観、調査を帝室博物館総長に願ひ出たが却下となる。

同月三十日 助教授山崎寛太郎は工芸技術講習所助教授（兼本校助教）に、書記佐藤重吉は同所書記（兼本校書記）に任命される。

十二月十七日 八田辰之助は鍛金部理事を命ぜられ、森田武は高村豊周外国出張中工芸科予科理事代理を、同じく丸山不忘は铸

金部理事代理を命ぜられる。
同月二十三日 講師比田井小琴は依願解嘱となる。

③ 卒業式

昭和十五年三月二十五日、第四十九回卒業証書授与式が行われ、同日より三日間、校内で卒業制作品陳列会が開かれた。左記はその記録文書の抜粋である。

第四十九回卒業証書授與式次第 (三月二十五日 午前十時)

- 一、新卒業生入場著席 (第講堂北口ヨリ出入 第一號 鐘)
 - 二、職員、参列舊卒業生著席 (第講堂東口ヨリ出入 第二號 鐘)
 - 三、來賓著席 (第講堂東口ヨリ出入 第三號 鐘)
 - 四、宮城遙拜、靖國神社遙拜、出征將士ノ武運長久ヲ禱ル
 - 五、校歌 (一 同 起 立)
 - 六、學校長式辭
 - 七、卒業證書及賞品授與 (卒業生前後敬禮)
 - 八、學校長告辭 (卒業生前後敬禮)
 - 九、文部大臣祝辭 (卒業生前後敬禮)
 - 十、卒業生總代答辭
 - 十一、式終了挨拶
 - 十二、來賓、職員、舊卒業生、新卒業生順次退場
- 附
- 一、退場後來賓、舊卒業生ハ休憩所ニテ休憩ノ事
 - 二、退場後職員、新卒業生ハ直ニ寫眞場へ集合ノ事

三、式ノ前後ニ於テ卒業生製作品隨意觀覽
答辭

本日茲ニ第四十九回卒業生ニ對シ證書授與ノ式典ヲ舉行セラル、ニ方リ朝野貴顯ノ御來臨ヲ辱フシ特ニ文部大臣閣下ノ御祝詞竝校長閣下ノ御訓辭ヲ拜受スルノ榮ヲ得タルコトハ生等ノ洵ニ欣幸トスル所ナリ 回顧スレバ入學以來早クモ五年ノ星霜ヲ經タリ 其ノ間御懇篤ナル御指導ト御薰陶ニ依リ各々其ノ志ス所ノ課程ヲ修了スルコトヲ得タリ 今母校ヲ去ルニ臨ミ欣慕ト感謝ノ情轉タ切ナルモノアリ 惟フニ生等業ヲ卒ヘント云ヘトモ僅ニ藝術ノ片鱗ヲ窺ヒ得タルニ過キス 苟モ此ノ小成ニ安ンスヘカラサルハ勿論ノコト將來各々其ノ修得シタル所ニ隨ヒ益々人格ノ修養ト技術ノ練磨ニ努メ以テ我邦美術ノ發展ヲ致ササルヘカラス 時恰モ光輝アル紀元二千六百年ニ際會シ東亞新秩序ノ建設ハ着々其ノ實ヲ舉ケ日本精神ヲ樞軸トスル新文化ノ創造ハ今ヤ我等青年美術學徒ニ課セラレタル光輝アル使命ニシテ其ノ責務ノ重且大ナルヲ想ヘハ須ク我カ尊嚴ナル國體觀念ニ依遵シ以テ興亞聖業ノ完遂ヲ期セシカ爲勇往邁進大ヒニ美術報國ノ誠ヲ致ササルベカラス 是併乍御鴻恩ノ萬分ノ一ニ酬ユル所以ナリト信ス

不肖卒業生一同ニ代リ右聊カ所懷ヲ述ヘテ感謝ノ微意ヲ表ス。

昭和十五年三月廿五日

東京美術學校第四十九回卒業生

總代 山崎元士

答辭